

# みいちゃんを送りだしたあと

—『はじめてのおつかい』は誰を支えたか—

田澤 薫

間もなく第二子が生まれようという我が家で、四歳半の娘が、赤ちゃんがいる家庭の兄妹のお話を好んで選んでいた時期がある。

『フランススのいえで』（R・ホーバン作、L・ホーバン絵、松岡享子訳、一九七二、好学社）、『はじめてのおつかい』（筒井頼子作、林明子絵、一九七六・三 ことものとも、福音館）、『おとうとなんかイヌならな!』（C・D・シールズ作、P・マイゼル絵、久山太市訳、一九九九、評論社）、『あさえとちいさいいもうと』（筒井頼子作、林明子絵、一九八二、福音館）、『モモちゃんとプー』（松谷みよ子作、一九七〇、講談社）。どの本にも、兄妹になった幼児の、赤ちゃんとの葛藤、兄妹としての成長などなど、第二子を受け入れる第一子の姿が

さまざまに描かれている。娘は、お話を通して、姉としての自分をシミュレーションしていたのかもしれないし、混乱を昇華させる手立てとしていたのかもしれない。やはり四歳半で姉となった経験をもつ私にとっても、娘が手に取ったお話は「わかる」ものばかりだった。求められるままに読みながら、先輩「おねえさん」が新米「おねえさん」にエールを送っている気分を味わっていた。

ところが、である。実際に二人の子どもたちとの生活が始まってみると『はじめてのおつかい』は、呑気には読めなくなってしまった。

この絵本は、ご存じの通り、五歳の「みいちゃん」が「まま」から「あかちゃんのぎゆうにゆう」を頼まれ

て、はじめてのおつかいに出かける物語である。大方は、みいちゃんの成長物語あるいは生活経験絵本として受け取られ、ファンも多い。これまでの私の理解もそうであった。それが、この物語は別の顔をもって、子ども二人との新しい三者関係に戸惑いながら倍増した日常雑事にあたふたしている私を質す一冊になったのである。まったく思いもかけないことだった。

買い物の依頼は、クレヨンで絵を描いているみいちゃんに突然降ってきた。赤ちゃんは泣いており、鍋は煮えたり、やかんはふきこぼれている。洗い物はそのまま、床にはかけ途中の掃除機が横たえられている。こうした状況で、精神的なゆとりを保っていられる母親はまづいない。無論、ままの「みいちゃん、ひとりでおつかいできるかしら」という声にイライラは表れていないし、ままの顔もにこやかに描かれている。しかし、ままの申し出は、何の心づもりもなかったみいちゃんをうなずかせる強さを含んでいた。

私の日常でも同じようなことが繰り返されていた。身が二つあっても対応しきれないほど、やるべきことは湧

いてくるように思われる。乳児の世話、家事、四歳半の娘の世話。ふと気がつくと、娘の世話は何らしていない。彼女は、母親の喧騒から離れた世界で、涼しい顔で自分の用事に余念がない。絵本を読み、ぬいぐるみで赤ちゃん役にして世話をやき、みいちゃんのようにクレヨンで絵を描いて、少しも私を煩わせてはいない。もし、この時、上の子のほうも手がかりだったら、母親は、直に「もうーっ!!」とこの子に向かって感情を爆発させるだろう。ところが、現実はそうではない。赤ちゃん、鍋、やかん、てんてこまいの原因は怒りをぶつけられる相手ではないのである。

そうすると、不思議なことなのだが、母親は上の子を忙殺ペースに引き込んで協働者にせずにはいられなくなる。一人遊びしているだけで充分に上出来のその子に、自分の大変さを理解してほしいと甘えてしまうのだろうか。

「ねえ、ちょっとお洗濯物を畳むの一緒にしてくれないかしら？」

「お母さんがオムツを替えている間に、着替えのベビー

服を出しておいてもらえる？」

「離乳食を食べさせるのできる？　そうしてもらえると、お母さんはみんなのご飯を支度できるんだけど。」

どう鼻屑目に見ても、母親と遊び途中の四、五歳児とでは、母親がして然るべきことばかり。険はあつても丁寧な依頼文型が選ばれるのは、そのことを潜在的に自覚しているからかもしれない。

ところでこの子は、「うん、いいよ」と快諾してしまふのである。お母さんのお手伝いが得意でたまらない、赤ちゃんのお世話だったら尚更うれしい。幼児期後期の人の成長の喜びのままに、母親が投げつけた用事に取り組み始める。隠された母親のイライラや八つ当たりに近い心持ちなど、思いもよらない。さっきまで自分が用事の一つもりでしていた遊びと今度の活動は、四、五歳の人の中では寸分の矛盾もなく直結するのである。

こうした経験を重ねながら、私はみいちゃんのままを思った。

みいちゃんが出かけたあと、相変わらず部屋はく

ちやぐちゃ、台所仕事も片づきはしない。でも、みいちゃんを送りだしたあと、不思議と気が済んではいまいか。自分だけが背負い込んでいるという不公平感も、ともかくも用事を終わらせなければ先に進めないような強迫感も消えてしまつてはいまいか。思えば、牛乳一本の買物、それほど絶対不可欠だっただろうか（絵本のさし絵を見る限り、赤ちゃんの月齢はまだ低くて、哺乳瓶の自身は牛乳ではありえない。このことも、乳児と暮らしはじめて気がついた）。「あかちゃんのぎゅうにゅう」なんて強い言い方をしたが、自分は多分、大変さを分かち合つてほしくてみいちゃんに難題をぶつただけだ。そう思うとまは急に優しくなる。はじめてのおつかいを強要するほど忙しかつたはずなのに、赤ちゃんを抱いて坂の下まで迎えに出してしまう。

一方のみいちゃんは、またひとつ成長できて誇りではちきれそうになっている。もちろん、「あれ、ま、ま、ここまで来れるなら面白い物にだつて自分で行けたんじゃない」とは思いもしないから言いもしない。まは短慮を戒められることもなく、穏やかな気持ちで目の回る日

常に戻っていくのである。

それが私の場合には、『はじめてのおつかい』のおかげで不問に付されなかった。絵本が、私の心任せの不条理を解き明かしてみせた。もちろん娘は、母親の私の痛みには気づこうはずはない。難題が母の弱さに由来するとは思ってもみないところは、みいちゃんと変わりない。ただ、その娘が最後のページを見るごとに不可解そうにつぶやくのである。

「みいちゃんは、もっと大きいはずなのにね。お母さんのエプロンの紐よりも頭が下なのはおかしいのにね」。

最後のページには、みいちゃん母子が帰る後姿が描かれている(資料)。牛乳を抱えたみいちゃんと、赤ちゃんを抱いたままが並んで歩いて行く。なるほど、標準からいってママが一六〇センチくらいで五歳のみいちゃんが一一〇センチくらいだとすると、絵のバランスはかなり不自然である。ままの半分にしかな描かれていないみいちゃんの身長は、せいぜい一歳児程度ではなからうか。娘には、みいちゃんの理屈に合わない小ささを見過ごすことはできない。だって、みいちゃんも自分も、母親の



▲資料『はじめてのおつかい』福音館書店  
Illustrations © Akiko Hayashi 1976.

助けになる頼もしい存在なのだから。

私には、この絵が、ままにとつてのみいちゃんをまさに描き当てているように思えてならない。時に自分の伴走者としての役割さえ期待しながら、その荷を負つてくれた途端にけなげさが際だつ幼子。まことに身勝手な親の思いなのだが、親心なんて存外、自分の弱さが伏流にあるのではなからうか。はじめてのおつかいに向かうみいちゃんの勇気に背中を押してもらったのは、ままにはかならないのだから。(尚絅学院大学女子短期大学部)

☆本稿は『舞々』第二号より転載したものです。